略ぼ句點と云ひ得べき場所に於て、所々に用ゐらるゝを以てなり、摩尼教經典が⊙⊙を以て句點を施こすことは事實なると共に、また普通の黑點二箇を用ゐること佛典等と同じきものもあり、要するにたゞ此の符號のみを以て摩尼經と定めんとする見解は、今日絶對的に不可なりと云はざる可らず。

飜譯に關する注意

一、回鶻文字はoとu、öとü、γとχ、kとg、pとb等の音を區別せず、同一文字を用ゐて之を表はせるを以て、文書に就て直ちに此等の音を區別せんとするは極めて難事なり、今の據る所泰西諸學者の音譯に鑑がみたれど、然も各家見を異にして規一せず、されば此の音譯に於ても現今のチャガタイ語をはじめ、諸方言を斟酌して轉寫したるもの少からず。

二、tとdとは元來文字の上に於て差異あれば、最も普通にtと發音すべき語も、dと書かれたる場合には必らずdを以て音寫せり。qはγ、χの上に二個の點を打てるものに對せしめz̤或はz̤は各々z字の下に一個もしくは二個の點を打てるものに對せしめたり、然れども今其の音價を知らず。

三、sとš（sh）とを字體の上より區別することは極めて困難なることとなりとす、此の音譯に於ては、兩字形が明亮に書寫せられたるものゝ外は、先輩諸學者の音譯と、現今の諸方言とに鑑みて譯寫せり。

四、二綴もしくは多綴語に於て中間の母音の發音は殆んどみな母音調和の法則に據れり。

五、二綴もしくは多綴語に於て中間の母音の省略せられたるものは音寫に於ても亦た之を省略して塡補せず。